

# 西日本新聞社賞

## 自然の命から物を作る

福岡県久留米市  
福岡教育大学附属久留米小学校6年

春山 夏菜絵

「あ、こんな所に鉛筆が。」

私が掃除をしている時、床に鉛筆が落ちていたのを見つけました。誰が落としたんだろうと拾い上げてみました。名前が書かれておらず持ち主がわからなかったため、落とし物入れに置きに行きました。えんぴつを入れるボックスがあるのですが、なかなか開かないので力を込めて開けると、そこには溢れんばかりの鉛

筆が入っていました。その時の衝撃を今でも思い出せます。まだまだ使

えそうなものの中には混じっており、これはひどいと感じてしまいました。なぜ、こんなに溜まっているのだろうか、そういう疑問がうかんで

きた。でも、私にもそういう経験があります。二ヶ月ほど前のこと鉛筆を使っていた時に、書き心地が良くな

き、鉛筆についても知りたかったの

で、本やインターネットで調べてみることにしました。すると、鉛筆には主に北米産で、ヒノキ科のインセ

く、軽い気持ちで鉛筆を捨てよう

すると、母が、

「まだ長いじゃない。もったいないわよ。」

と言いました。それに対し私は、別にいいじゃない。まだたくさん鉛筆はあるもの、と言ってしまいました。これに困った母は、

「たかが鉛筆一本。されど鉛筆一本。」

と教えてくれました。あの時には、意味が分らなかつたけれど、今、思うと身にしみるように分かります。もとをたどれば、そこには木があり、命がありました。

人々に使われるため、木は伐られ加工されていきます。これは生きていた木を、木の命をきることに同じ

なのです。だから、鉛筆を粗末にするのは、やってはいけないし、止めなければならぬのです。

この現代社会において、鉛筆一本のありがたみなど分らなくなつてしまいました。短くなれば、また新しいものを使う、こんな何不自由のない今だからこそ、考える必要があるのです。人間は自然から多大な恵みを受けてきました。なのに人は、そのありがたさをすっかり忘れてしまい、自己のことだけしか考えなくなつてしまつたのです。「命を使って物を作る」このような生き方をしている私達にとって、これは絶対に覚えておかなくてはならないことです。鉛筆でも同じです。生きていた

木の命を生かそうと作られた鉛筆を粗末にするということは、自然を粗末にすることと同じなのです。

この、落とし物の鉛筆を通してたくさんを知ることができました。

「たかが鉛筆一本。されど鉛筆一本。」

一つ一つ大事にすること、これは絶対に忘れません。同時に人は自然から多大な恩恵を受けているということも常に頭に入れて、行動しようと思います。これからも、自然や大地からの恵みを精一杯かみしめて毎日を過ごしていきたいです。